

聖書：ヨハネの黙示録 6：1～8

説教題：最初の四つの封印

日時：2021年2月14日（朝拝）

今日からヨハネの黙示録の第6章に入ります。先の4～5章でヨハネは天の御座の光景を見ました。広い空港において管制塔に上ればすべてを俯瞰することができ、またその場所がすべてを統括し、支配しているのと同様、天における御座こそこの宇宙と世界を真に支配し、治めているコントロールタワーのようなところであるということでした。その御座に着いている方、神は世界の歴史に関する詳細なご計画を持っておられることが、その右手に巻物があったという表現で示されていました。その方から、ただお一人その巻物を開くにふさわしい方、子羊キリストが受け取ったということが前の5章に記されました。その方は7つの封印一つ一つを解いて、そこに記されている神の御心を実行して行かれます。この6章では7つの封印の内、6つ目までが解かれ、7つ目は8章1節で解かれます。今日は最初の4つについて見て行きます。

まず第一の場面です。1節に「また私は、子羊が七つの封印の一つを解くのを見た。そして、四つの生き物の一つが、雷のような声で『来なさい』と言うのを聞いた。」とあります。ここで注意すべきは「来なさい」という言葉は誰に向かって言われたかということです。2節の最初に「私は見た」と記されているため、一見ヨハネにそう言われたかのように読んでしまいやすいかもしれません。しかし「来なさい」という言葉はこの後も繰り返されます。そのたびにヨハネは呼ばれてそこへ行ったという風に読むべきでしょうか。どうもそうではないことが2回目以降を見ると分かります。3節で第二の生き物が「来なさい」と言いますが、次の4節を見るとその言葉を受けて動いたのはヨハネではありませんでした。その言葉を受けて出て来たのは赤い馬またそれに乗っている者でした。5節の第三の場面でも同じです。「来なさい」という言葉を受けて行動したのはヨハネではなく、黒い馬であったと読むのが自然だと思います。第4の封印に関する7～8節も同じです。ですから1節で雷のような声で「来なさい」と呼びかけられたのは、2節に出て来る白い馬とその乗り手であったと分かります。これが具体的に何を表しているかはこのあと見ますが、まずここで心に留めたいのはすべてはキリストの主権の下で起こっている！ということです。子羊が封印の一つを解き、それに従って御座の近くで仕えるケル

ビムのような天使的存在である四つの生き物の一つが「来なさい」と命令しました。その命令に従って、白い馬とその乗り手が現れました。ですからそれが何であろうと、またこのあと記されるすべても、それはただキリストの権威のもとで起こっているということです。この方こそ歴史の上に完全な主権を持つ方なのです。

ではその声に従って現れた白い馬とそれに乗る者とは何のことなのでしょう。その者は弓を持っていました。また彼は冠を与えられ、勝利の上に勝利を得るために出て行ったとあります。ある人は白い馬に乗っている方として、この方は聖い聖者を現しているのではないかと、特にそれはキリストご自身のことではないかと言います。後に黙示録 19 章 11 節に白い馬が出て来ます。それに乗っている方についてここでは「確かで真実な方」と言われ、またその名は「神のことば」と呼ばれるとあります。さらに 16 節で「王の王、主の主」と出て来ます。そこでは明らかにキリストを指しています。その方が今日の箇所でも勝利の上にさらに勝利を得るために出て行ったのではないかと。つまり世の終わりの前に全世界への福音宣教のために出て行ったことをこれは意味しているのではないかと。しかし結論から先に言えば、そうではないと思われます。このあと見ますように 4 つの封印はひとまとまりのもので、いずれもさばきを表しています。一つ目だけがキリストによる福音宣教で、後の 3 つは恐ろしいさばきを指すというのではバランス的におかしくなります。また 7 つの封印に続いて 8 章 2 節から 7 つのラッパについての話が始まりますが、そこでも最初の 4 つは一体の関係にあり、いずれもさばきを表しています。ですから今日の箇所もそのように見るのが適切だと思われます。それにキリストが封印を解き、キリストに仕える天使的存在が「来なさい」と語り、その言葉に従ってキリストご自身が現れたという考えはおかしいのではないのでしょうか。むしろこの 2 節に描かれているのは、飽くことなく勝利を追求する征服者の姿です。1 世紀において勝利者は白馬に乗りましました。凱旋した将軍は白い馬にまたがり、勝利者のしるしとしての冠を頭にかぶりましました。つまり世界の歴史にはさらなる支配権を手に入れようとして戦争を起こす者、他の国々を攻撃し、侵略し、さらなる支配拡大を狙ってむさぼり戦う者が現れる。そういう意味であると考えられます。

続いて第二の封印が解かれ、「来なさい」との声に従って現れたのは 4 節の「火のように赤い馬」でした。それに乗っている者は「地から平和を奪い取ることが許された」とあります。その結果、人々は互いに殺し合うようになります。彼には大き

な剣が与えられたともあります。これは一つ目の支配拡大を求めての戦争に続く暴動、虐殺、内乱といったことを指すと思われます。今回の馬が「火のように赤い」と言われたのは流血のイメージでしょう。最後に出て来た「大きな剣」も人々が互いに傷つけ合い、滅ぼし合うようになることを象徴するものだと思います。

第三の封印が解かれて、次に現れたのは黒い馬でした。これは何でしょうか。それに乗っている者は秤を手に持っていたとあります。その秤は6節の「 」の中の言葉と関連があることは容易に分かります。小麦一コイニクスとある部分には印がついていて、欄外の6を見ると「一コイニクスは約一リットル」とあります。一デナリと記された部分にも印がついていて欄外に「一デナリは当時の一日分の労賃に相当」とあります。小麦1リットルは大人一人の一日分の食料に相当したようですが、当時は1/8デナリほどで手に入れられたようです。それが一デナリと言われているということは値段が異常に高騰したということです。800%のインフレです。何を言いたいかと言えば、戦争や暴動に引き続いて食べ物が手に入りにくい状態、すなわち飢饉が生じるということでしょう。国土が荒廃し、食料不足に陥り、経済的な混乱と災いが生じる。6節最後に「オリーブ油とぶどう酒に害を与えてはいけない」とありますが、これはどういうことでしょうか。この声について6節最初に「私は、一つの声のようなものが、四つの生き物の真ん中でこう言うのを聞いた」とあります。これは誰の声でしょう。四つの生き物は御座の周りで仕える天使的存在です。その真ん中から聞こえたのですから、これは子羊キリストあるいは御座に着いている神の声です。その方はここで、この経済的な災いにある種の歯止めをかけておられるということです。確かに飢饉で表される厳しい状況がもたらされますが、しかしその悲惨が部分的なレベルにとどまるようにしておられる。オリーブやぶどう酒に害を与えるところまで行ってはいけない！と指令を出して下さっているわけです。いきなりすべてが究極的な破滅に至らないように！と。

そして第四の封印を解いた時、そこに現れたのは青ざめた馬でした。これに乗っている者の名は「死」で、よみがそれに従っていたとあります。これだけで恐ろしいことですが、彼らには地上の1/4を支配して殺す権威が与えられたともあります。これは第一の封印、第二の封印、第三の封印が解かれた先にある恐ろしい状態と言えます。誰もが青ざめた表情にならざるを得ない、ほとんど死に支配されたような世界の状況を示すのでしょう。そのさばきの手段として8節に「剣、飢饉、死病、

地の獣」と四つのことが記されています。剣は第二の封印のところで出て来ました。飢饉は第三の封印が解かれた状態と関係しました。「死病」はこの8節前半で青ざめた馬に乗っている者として記された「死」という言葉と同じものです。2回目に出て来る「死」は死に至る手段として語られていますから「死病」あるいは「疫病」の意味だろうと注解者たちは言います。戦争が起こり、国土が荒廃し、食べ物が十分に取れず、疫病が蔓延しやすいということでしょうか。では4つ目の「地の獣」とは何でしょうか。これはおそらくダニエル書と同様、この黙示録と深い関係があるエゼキエル書の言葉を下敷きにしたものと思われます。エゼキエル書14章21節に神が人や家畜を断ち滅ぼす刑罰の手段として「剣、飢饉、悪い獣、疫病」の四つが出て来ます。今日の箇所と全く同じです。そして悪い獣について同じエゼキエル書14章15節にこう書かれています。「もし、その国にわたしが悪い獣を行き巡らせ、それを不毛にし、荒れ果てさせ、獣ゆえに通り返る者もいなくなるなら、云々」と。つまり国土の荒廃に伴って、悪い獣が行き巡るようになり、それが人々の脅威となるという状況のことでしょうか。こうして地の1/4がこの災いの下に置かれるようになる。ここでもまださばきは部分的です。恐ろしい状況が発生しますが、でもまだ3/4は保たれています。

以上のことは何を私たちに語っているのでしょうか。私たちはもしかするとただ困惑するばかりだったかもしれません。しかし実はここはイエス様が福音書の中で語られた終わりの日についてのメッセージと同じものです。今日見た4つは簡単に言えば、戦争、暴動、飢饉、死病と言えます。この4つを心に留めてルカの福音書21章9～11節を参照したいと思います。9節に「戦争や暴動のことを聞いても、恐れはいけません。まず、それらのことが必ず起こりますが、終わりはすぐには来ないからです。」とあり、ここに戦争や暴動が必ず起こると言われています。また10節に「民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がること」、そして11節に大きな地震のことが述べられた後、「方々に飢饉や疫病が起こり」と言われています。これは今日見た黙示録の箇所と全く一致します。このあと恐ろしい光景や天からの大きなしるしが現れると言われ、25節以降では天変地異のことが語られますが、それは次回見る黙示録6章12節以降で言われることと同じです。これはマタイの福音書に記されているイエス様の言葉とも同じです。マタイ24章6～9節を見ると、やはりそこに戦争、暴動、飢饉、そして死の災いが順に語られています。そして同時に心に留めるべきは、いずれの箇所でも終わりはすぐには来ないと言われていることで

す。それは産みの苦しみの初めだと言われています。確かにこれらは終わりの日が必ず来ることを示すしるしです。世界は最後のさばきの日に向かっていきます。しかしだからと言ってこれらが見られれば直ちに終わりが来るのではない。そのプロセスの始まりだと言われています。ですからどちらの箇所でも「最後まで耐え忍ぶ者は救われます」とイエス様は言われ、忍耐の歩みの重要性について語っておられました。今日見ている黙示録の箇所も同じように読む必要があると思います。ヨハネの黙示録と言うと、ある人は世の終わり直前の特別なしるしについて書いてある秘密の書のように読もうとします。しかし前の5章でイエス様は御座に着いている方から巻物を受け取りました。これはイエス様が復活して天に上り、父なる神の右の座に着いた時のことを指すと申し上げました。そのイエス様が封印を解き始めた時のことを今、読んでいます。ですからこれはイエス様が天に上られて以降のこと、つまりヨハネが生きていた1世紀から今日の私たちの時代を含む全期間に関わる言葉です。聖書が言う終わりの日、すなわちイエス様の復活から最後の再臨の日までには、こういうことが起こるといことが言われているわけです。今日見た内容は結論としてイエス様がかつて言われたことと内容的に同じですが、それがヨハネの黙示録ならではの仕方、その象徴的な方法によるのでなければ私たちの心にこのようには入って来ないような仕方、旧約聖書のイメージを用いながら、衝撃的に、またインパクトある方法で語られているのです。

今日の箇所から以下の二つのことを心に留めたいと思います。一つはこの世界の災いと子羊の主権についてです。イエス様はただ単に世界の歴史はこうなると預言しているわけではありません。今日の箇所で強調されているのは子羊の主権です。子羊が封印を解き、一つ一つのことが起こっています。四つの生き物を通して「来なさい」という号令がかけられて、災いをもたらす色々な馬とその乗り手が現れました。もちろんこれは神が今日の箇所に記された悪の作者であるということではありません。支配拡大を求めて戦争を起こすのは人間です。平和を壊し、互いに殺し合うのも人間です。それによって経済的災いをもたらす、死を呼び寄せているのも人間です。しかし子羊がそれらすべてを支配し、その主権の力を発揮して彼らを行くがままにさせています。それによってこの世は一層悪へと進み、そこから生じる災いと混乱を身に招いています。神はそこに天からの怒りを啓示し、さばきを行い始めています。今日のコロナウイルスもその例外ではありません。神はここに何かを示しておられます。ですから私たちは恐れなければなりません。そして早くに悔い

改めなければなりません。後の9章20～21節を見ると、これらの災いは人々を悔い改めへ招くためのものでもあることが示されています。残念ながらその箇所では、人々はそのチャンスを生かさないということが言われていますが。最終的なさばきの日はまだ来ていませんが、今日の箇所で見た様々な災い、そして今日の私たちが経験する色々な災いはやがて来る真のさばきを指し示すものです。その前触れなのです。

もう一つのことは子羊の主権と信仰者の慰めについてです。私たちはキリストを信じたからと言ってあらゆる苦難から解放されるわけではありません。この世にあって周りの人々と同じ苦難の中にあります。あるいは信仰のために一層厳しい中を通らされることもあります。しかし今日の箇所から教えられることは、たとえ私を取り巻く環境がどのようなものになろうとも子羊キリストがその上に完全な主権を持っておられるということです。この世界がたとえカオスに見えても、何の意味もなく災いが生じているのではない。封印を解き、この世界を真に支配しておられるのは子羊です。その方は私を愛し、私の代わりに屠られ、いのちまでささげてくださいました。その方がその犠牲を通して私を守り、神の良き計画がゴールに達するようにすべてを支配して導いておられます。どのように守ってくださるかについては第6の封印と第7の封印の間に記される7章で見ることになります。ですから私たちは様々な災いや苦しみに直面しても慌てないでいたいと思います。世界の歴史はこのように進むと主は言われました。白い馬に乗って自らの力を誇る人が現れたかと思うと、続いて火のように赤い馬、黒い馬、青ざめた馬が現れます。しかし人々が青ざめた顔をしているただ中で、私たちは心静かにしていることができます。目の前で起こっていることは聖書であらかじめ言われている通りのことだからです。そしてその時も私たちのために屠られた子羊が主権を持ち、神の目的に従ってすべてを導いておられます。そのことを信仰の目で見てとって、確信を持って子羊により頼み、この方に祈り、最後まで耐え忍ぶ歩みへ導かれたいと思います。人の目に悪と見えることを通しても私たちを守り、聖め、救いの完成へ導いて下さる主に信頼し、心を高く上げて、主に従い続け、主に導かれる歩みへ進みたいと思います。